星槎大学紀要（Seisa Univ. Res. Bul.）共生科学研究 No.18　103～118（2022）

研究ノート

20 世紀初頭イギリスにおける柔術、女性、そして日本：文化史としての教育史の視点から

平　岡　麻　里

HIRAOKA, Mari

キーワード：20世紀初頭イギリス、柔術、女性、日本、トランスナショナル

はじめに

20 世紀初頭イギリスの女性参政権運動のうち武闘派として知られる女性社会政治同盟（WSPU）の女性たちが自衛のために柔術を使ったことは、当時のイギリス社会では新聞・雑誌などの報道により比較的広く認知されていた。一方、この事象は歴史研究としては、男性中心で語られる柔道史に花を添える、あるいは男性社会に挑む勇敢な女性のエピソードとしての扱いが長く続いていた。特に 2010 年代以降、スポーツ史、文学、文化研究などの分野で徐々に注目を集めるようになり、2018 年のイギリス女性参政権 100 周年を契機に過去の女性参政権運動に注目が集まり、結果としてその歴史が子供向けを含む一般書籍や学術書、研究論文などとして盛んに刊行されるようになるなかで、柔術を実践した女性たちを中心的なテーマとして取り上げる研究も増えてきている。

そうした研究動向を踏まえ本稿は、現在までの研究が「日本」「柔術」「女性」であることを自明のこととしたまま、対象となる個人や当時の社会状況のユニークさからテーマが設定されている傾向がある点を指摘するとともに、19 世紀末以降イギリスにおいて身体文化（physical culture）への関心が高まるなか、他にも実践されていた武術や体術があるなかで、なぜ女性たちが日本の柔術に注目し、実践するに至ったのか、それが彼女たちのその後の人生にどのような影響を与えたのか、というイギリスを研究対象とする日本人教育史家として当然持つべき問いに答えるため、この社会・文化的な事象の背景を整理することを目的としている。具体的には、近年の研究動向を検討した上で、本研究の背景となる 20 世紀初頭イギリスの社会･文化について注目すべき点をイギリスにおける日本、イギリスにおける柔術、イギリスにおける女性と柔術の順で概観し、当時の教育制度や教育観を参照しながら情報を整理する。その後、この事象をトランスナショナルな文化受容の事例として文化史的視点から分析する可能性と、当時の女性たちの人生に与えた柔術の影響という教育史的視点からの考察を行うための今後の一次史料調査への課題を明らかにする。

星槎大学共生科学部　m_hiraoka@seisa.ac.jp

１．先行研究の検討

本研究のテーマにおける先行研究としては、スポーツ史、とくに柔術（柔道）を通じての日英交流史という視点がある。イギリスの女性柔術家の活動を取り上げた研究については、カランによる複数の研究があるが、フィービー・ロバーツ（Phoebe Roberts）、イーディス・ガラッド（Edith Garrud）、そしてサラ・マイヤー（Sarah Mayer）をイギリス女性による柔術および柔道実践の例として取り上げた共著論文が最も包括的である（Callan, Heffernan, Spenn, 2018）。日本側の柔道実践者による研究としては、日本の女性柔道の発展過程を社会学の見地から批判的に分析した溝口（2015）の博士論文がある。溝口はアメリカやフランスとともに日本とは異なる発展を遂げた海外事例の１つとしてイギリスでの女性柔道を紹介している（pp.36-40 & 104-106）。溝口は柔道のオリンピックメダリストであり、カランも柔道の柔道家であるように、このカテゴリーでは研究者自身も柔道の実践者であることが多く、イギリスにおける柔道の発展と日英の民間交流の例として肯定的に扱われがちであり、相対的にイギリスの社会や文化に関する考察がやや少ない傾向がある。

文学おいて「新しい女性」と身体文化の関係を論じる際に柔術を取り上げた研究もある。例えばエメリン・ゴッドフリー（Godfrey, 2012）は W.H. ウェルズの恋愛小説『アン・ヴェロニカ (Ann Veronica)』（1909）の主人公であり女子高でホッケーや柔術をたしなみ、保守的な父親から逃れてロンドンで一人暮らしをして女性参政権運動にも飛び込むアン・ヴェロニカの心情や行動を分析し、柔術により当時のいわゆる「新しい女性」が女性らしさを失うことなく自衛する力、言い換えれば「強さ」を手に入れることができたと論じている。一方、ロトゥンノ（Rotunno, 2016）は女性参政権運動で活動家の女性たちが使った柔術をすでに女性に実践されていた体操とあわせて論じ、どちらも同様に肉体だけでなく精神の強さを求めて訓練を行っていたと主張している。また、当時の女性をとりまく状況はフィクションに描かれているよりも現実の方がより進んでいた可能性を指摘していることは興味深い。

柔術が日本発祥である点に重点を置き、当時のイギリスの社会情勢を分析した研究も存在する。なかでも橋本（2009, 2013）は複数の著作で日本から柔術という伝統文化がイギリス社会へ伝播し、受容されていく過程を詳細に考察している。欧米における伝統的日本イメージである「あべこべの国」として、男性的なイギリスとは異なり男性も女性的（弱い）国というイメージから、日露戦争を契機に「柔弱で女性的ながら、油断のならないライバル」（2009, p201）という見方へ変化し、当時のイギリスに蔓延していた自国が「帝国」の地位から凋落することへの不安を背景に、柔術が流行したと論じている。一方、岡田（2013）はもっぱら女性参政権運動との関連で 20 世紀初頭イギリスにおける女性による柔術実践を、その新聞・雑誌における表象から日本の柔術がイギリス社会に伝わり、その意味を変容させながら定着した事例として検討している。さらには、新興国である日本の文化が当時随一の先進国であるイギリスへ受容されたこと、しかも本来男性的な武術の一派である柔術が女性に実践されたことに注目し、この事象を文化が国際関係や世界経済の覇権の影響力とは異なった自律性、つまり文化的覇権（ヘゲモニー）を持ち得る可能性を示唆している。

ゴッドフリーやロトゥンノが文学作品の登場人物を分析したように、現実の柔術の女性実践者に関して、その心情や社会的、経済的、そして教育的活動として女性たちの活動を検討する研究も増えつつある。ルーザー（Looser, 2010）は山下筆子（Fude Yamashita）、ガラッド、フローレンス・ル・マール（Florence Le Mar）―順に、当時のアメリカ、イギリス、ニュージーランドで活躍した女性柔術家たち―を取り上げ、彼女たちのパフォーマンスは商業的な興行ではあるが、その活動を通じて女性の自衛の可能性とその方法を伝え、その結果フェミニスト思想を広める教育機会ともなっていたと結論づけている。また、ラウズ（Rouse, 2017）は革新主義時代のアメリカで自衛手段としてボクシングや柔術を学んだ女性たちには、自衛といっても単に外出時に暴漢から身を守るためではなく、家庭内暴力への対策や政治的自己実現の手段を求めていたこと、つまりこの流行は当時のアメリカ社会で女性がおかれていた困難な状況を反映していたことを指摘している。

このように20世紀初頭の女性による柔術実践に関する研究は近年イギリス以外の地域へ研究対象が広がりを見せている。しかし、イギリスの女性柔術家たちに関しては研究対象がイーディス・ガラッドに偏りすぎていること、WSPUとの関連が強調され過ぎていること、さらには個別の事例に対して当時のイギリスの社会や文化、および日英関係へ言及されることはあるが、20世紀初頭に日本の柔術を積極的に実践したイギリス人女性がいたということを社会・文化的現象として捉える研究はなく、個人として生きた女性たちを取り巻く環境とその人生についての調査もほとんど行われていないことなどから、この事象は文化史・教育史両面でより包括的な研究が待たれる研究対象であると言えるだろう。

2．イギリスにおける日本

20世紀初頭イギリスで女性が柔術を実践した事情を検討する上でまず念頭に置くべきことは、当時のイギリスの中上流階級や知識人たちにとっての日本は現代以上に身近であったことである。すでに十分な研究の蓄積があるモネやゴッホなどの芸術分野のジャポニズムについてはここでわざわざ論じる必要はないだろう。イギリスにはホイッスラーやロセッティ、ビアズリーなどジャポニズムの影響を受けて制作活動を行う芸術家もいたが、イギリスでは芸術として以上にリバティ百貨店の商品に代表される日英折衷のしゃれた日用品、例えば、日本風のガウン、提灯、扇、などがもてはやされた。こうしたイギリスの日本趣味は1862年の第2回ロンドン万国博覧会を契機に広まったとされるが、当時の徳川幕府に博覧会への協力を断られた駐日イギリス公使ラザフォード・オールコックの私的コレクションが展示されたこの博覧会の「日本セクション」は、蓑や笠、提灯など生活工芸品が中心であり、博覧会を訪れた日本人には不評であった。しかしながら、1878年にイギリス人の工芸デザイナーであるクリストファー・ドレッサー（Dresser, 1878, p.169）がオールコックに日本の事物への興味をもつきっかけとなったことに謝意を示しているように、イギリス社会における日本趣味の流行に大きな影響があったことは間違いない。

一方、エンターテイメント要素としても日本はイギリス社会で受け入れられていく。1860

年代、日本の軽業師は1867年のパリ万博前後に大挙して海を渡り、欧米各地で興行を行った時期にイギリスでも興行を行っていた。井野瀬（1990）はミュージック・ホールに出演した日本人や日本関係の出しものを調査し、1867年には「ジャパニーズ・トミー」という出演者がいたことを紹介している。ミュージック・ホールとは歌、寸劇、手品、曲芸、力自慢などの大衆演芸を見せる主に労働者階級を観客とした娯楽施設であり、日本人や日本を題材とした出し物はその後も時折登場している（井野瀬，1990, pp.4-5 & 307-312）。その後1880年代にはさらに日本ブームが加速する。1885-87年には日本の風俗や一般的な文物を見世物とした日本人村（The Japanese Village）がロンドンのナイツブリッジで開催され、ギルバート＆サリバンはサヴォイ・オペラの9作目に日本からインスピレーションを得たとされる『ミカド（The Mikado; or, The Town of Titipu）』（1885）を発表し、どちらも大変な人気を博していた。この時期には『グレート・タイキン（The Great Tai-Kin）』『ジャップス（The Japs; or, The Doomed Daimio）』などの日本を題材にした出し物は他にも上演され（光平有希，circa. 2021）、その後1890年代には『芸者（The Geisha）』（1896）が『ミカド』を超える興行成績を記録する（多和田，2016, p.321; 2017, p.241）。このように、「ごくふつうのイギリス人の周辺に日本人をイメージできるものが存在したこと自体が重要なことだった」との井野瀬の指摘（1990, p.311）は注目に値する。

しかし、このことは当時のイギリス人が同時代の日本人を実際に生きている同じ人間として身近に感じていたというわけではない。1891年にオスカー・ワイルドは、日本を古代ギリシャのもう一つの例として挙げながら「実際、日本に関するなにもかもは純粋な発明品であり、そのような国もなければ、そのような人々も存在しない」（Wilde, 1907［1891］, pp.53-54［日本語訳は著者］）と断言しているように、日本人はあくまでしゃれた文物を生み出すセンスのある、か弱く小さな人々であり、男性に従う女性または笑いを誘う奇妙な人物としてフィクションに登場する存在であった。

そうした日本イメージからイギリス人が日本人を戦う力を持つ強い国民であると捉える契機となったのは日露戦争である。例えば、週刊総合文芸誌である「アカデミー（The Academy）」は1910年に日露戦争が与えた心理的影響を次のように表現している。

> 日本が天朝国［清国］に勝利したことは、われわれに大きな印象を与えなかった。われわれは長い間、中国を伝統はあるが、のろまな眠れる竜と見なしていたからだ。しかし、ほとんど何の前触れもなく、日本が突然立ち上がり、ロシアの大きな熊を殺したとき、我々は、可愛いけれども無力な小さな茶色の人々が住む日本のおとぎの国という考えを捨てざるを得なかった（*The Academy,* 79, 1910, pp.272-273［日本語訳は著者］）。

日清戦争（1894-05）や日英同盟の締結（1902）の影響についても論じられることがあるが、やはりヨーロッパの列強の一つとみなされていたロシアが相手であることが重要だったのである。

世界的に見ても日露戦争は最初の、そして最も研究された近代戦争の一つであり、当時のジャーナリストや軍事・海軍専門家によって詳細に観察された。イギリスは、陸軍の場合は

半世紀、海軍の場合は100年近く、大国との近代戦争に関する情報と経験を欠いていたこともあり、また日本は唯一の同盟国であったため、この戦争の動向には特に関心を向けていた。しかし、この戦争に際してのイギリスの心理状況は軍事的な情報の必要性以上に社会の奥深くに根ざした広い背景を持つものであった。ピューリタニズムの影響を強く受け、勤勉、節制、禁欲、貞淑を特徴とするヴィクトリア朝中流階級の道徳規範はイギリス文化の中心的存在であり、世界におけるイギリスの優位性の源泉とみなされることもあった。しかし、第二次選挙法改正（1867）により都市部で年間10ポンド以上の家賃を払う世帯主や下宿人に選挙権が与えられ、その後1884年には農村部にも拡大されたことにより、新たに加わった選挙民の存在がこの伝統的道徳規範を揺るがし、労働者階級が通う基礎学校での公教育ではイギリスの優位性を維持できないとの声が大きくなる。また、南アフリカでの第二次ボーア戦争（1899-1902）で明らかになった労働者階級の不健全な状態も深刻な社会問題となっていた。産業革命以降急激に増えた人口が流入した都市部では労働者の劣悪な環境での労働や生活については以前より問題視されてはいたが、実際に労働者階級の陸軍志願者が何人も不合格になったことから、国家の問題として真剣に問われるようになったのである。

こうした議論の背景には、このままではイギリス人は精神的にも肉体的にも人種として退化してしまうのではないかという社会ダーウィニズムの影響を受けた「国民の退化」（national deterioration）への不安があった。社会ダーウィニズムとは、チャールズ・ダーウィンの進化論を従弟であるフランシス・ゴルトンが人間社会に適用したものであり、社会や文明の進歩は社会集団間の競争の結果であるという考えである。生存競争に勝ったものが適者生存により生き残るため、生き残っている者はもともと生物学的に優れていたという理屈である。集団として考えると、生物学的に優れている者からなる集団は進歩し、劣っている者が多ければ衰退する。世界の工場を擁する日の沈むことのない大帝国を築いたイギリス人が20世紀初頭において自身の弱さを目の当たりにした時、自身がもはや生存に適さなくなっているのではないかという思いを抱くのも当然のことであろう。ゴルトンはその解決策として社会から生存不適格者を取り除くことを考え、1883年に優生学（eugenics）として提唱した。

優生学には生存に適さない人間が生まれてこないようにするネガティブな方向と生存に適する人間を増やすポジティブな方向とがあることを示した上で、飯田（2011, p.478）はこの考えをイギリス階級社会の考え方を反映したものであるとしている。中流階級の道徳規範とパブリック・スクールで奨励されるクリケットやラグビーなどの団体競技（games）によって自己を犠牲にしてでも所属団体に奉仕する精神とそれを可能にする強靭な肉体を持つエリートの育成を理想とし、中上流階級と労働者階級が社会的・文化的に分断された社会において優生学の考えが生まれたという説明は、結果論ではあるが納得できる。

イギリスにおけるポジティブ・ユージェニックス（優生学）としては、19世紀末から健康や公衆衛生への関心が高まり、1884年には国際衛生博覧会（The International Health Exhibition）がロンドンで開催された。また、1871年の改正教育令（the Revised Code）によりそれまで3Rs（reading, writing, and arithmetic）中心であった基礎学校でのカリキュラムに加えて、軍事教練（military drill）にも補助金が支払われるようになる。これは労働者階級

の子どもたちの身体を鍛えるだけでなく規律をももたらすことができると考えてのことだったが、機械的な動きは退屈で生徒には不人気だった。20 世紀初頭には体操やダンスなども教えられるようになり、やがて公立の学校にも団体競技も導入される。このように「国民の退化」の回避方法を模索していたイギリス人の目には、日露戦争の結果がどう映ったのかは想像に難くない。イギリスの凋落の傾向を感じつつあったまさに同時期における日本の急激な進歩が「日本の奇跡的勝利」とともに頻繁に報道され、その鮮烈な対称性により、シンプソンが日露戦争を「ボーア戦争の教訓の第二弾」(Simpson, 1979, p.226) と呼ぶようなインパクトをイギリス社会全体に与えたのである。

20 世紀初頭のイギリスには一般市民にも合理的な教育を受けた人々が増え、報道により遠い異国の情報の入手も可能になった。中世の封建社会から近代制度を持つ国民国家へと急速に変化する日本を観察した社会ダーウィニズムの世界観を持つ人々は、やがて日本を社会の進化の模範とみなすようになる。一方、日本が単純な好奇心や異国情緒の対象であることを望む人々もまだ存在していた。これらの集団は重なり合うことも多く、よって日本に対する態度は一様ではなく、しかも首尾一貫していなかった (Hiraoka, 2015, p.259)。後述するが、このイギリスにおける二つの日本観の存在は、イギリス人「女性」による「日本」の「柔術」の実践を文化史としての教育史の視点から分析する本研究でも重要な視座のひとつであることをここで指摘しておく。

3．イギリスにおける柔術

公式に記録されたイギリスにおける初めての柔術の紹介は 1892 年のロンドン日本人協会 (The Japan Society) 設立総会での講演である。当時日本銀行の命によりイギリスへ留学していた志立鉄次郎 (講道館初段) による英語での講演と、日本総領事館一等書記官の呉大五郎を助手とした実演が行われ、その内容は後に「ロンドン日本人協会紀要第一巻 (Transactions and Proceedings of the Japan Society, London, vol. 1)」(1893) に掲載された。これ以前にも英語による紹介としては日本国内で発行された「日本アジア協会会誌 (Transactions of the Asiatic Society of Japan)」に掲載された嘉納治五郎と T. リンジィ (Rev. T. Lindsay) による論文 (1889) があり、イギリスでも各種博覧会や前述の日本人村、さらに遡ると 1860 年代の曲芸や軽業の一座の興行で民間による柔術の実演はあったと推測される (小野, 2002, p.14)。この志立の講演は自由党系の週刊新聞「サタデー・レビュー (Saturday Review)」により報道されたが、日本村で実演されていた相撲と取り違えるなど (Bowen, 2004, p.455)、この時点ではまだ柔術がイギリス国内で大きな反響を得るには至らなかった。

柔術がイギリスで広く知られるようになるきっかけは、1898 年に E. ウィリアム・バートン = ライト (Edward William Barton-Wright) がロンドンのピカデリーにあったセント・ジェームズ・ホールで行った、彼の考案した武術で希望者からチャレンジを受けるデモンストレーションである。バートン = ライトはインド生まれのイギリス人で、鉱山技術者として世界各地で働いたのち、日本の神戸に 1894 年から技師として 3 年間滞在していた。早くから格

闘技への興味を持っていたと後に彼自身が語っていること、神戸で地元の専門家から柔術の指導を受けていたことなどから、彼が1892年の志立の講演を知っていた可能性が指摘されている。また、講道館でも短期間指南を受けたとも言われている（岡田，2014, p.187; Wolf, 2010, p.452）。彼は自らの考案した武術をバーティツ（Bartitsu）と呼んでいた。この名称は彼の名前の一部であるBartonとJujutsuを合体させた造語だとされているが、その内容はイギリスのボクシング、日本の柔術、フランスのサバットなどを融合させた総合格闘技であった（Wolf, 2010, p.452）。

セント・ジェームズ・ホールのデモンストレーションの反響を受け、バートン＝ライトは当時の皇太子エドワードからパフォーマンスを披露するよう命を受けることになり（1900年に予定されていたパフォーマンスは彼自身の怪我のためキャンセルされた）、スポーツをテーマとした紳士クラブであるバース・クラブ（Bath Club）の会員権を3年間無料で提供されるなどイギリス社会で武術家としての地位を確立する。1899年には同クラブの“Ladies' Night”で柔術デモンストレーションを実施し（Bowen, 2004, p.456）、同じ年には「ピアソンズ・マガジン（Pearson's Magazine）」に「新しい護身術（The New Art of Self-Defence）」と題するバートン＝ライト自身の手による記事が写真入りで2回にわたり掲載され、イギリスだけでなくアメリカでも広く読まれた。この人気を受け、バートン＝ライトは1900年にロンドンのソーホー地区にヘルス・クラブと学校（Bartitsu School of Arms and Physical Culture）をつくり、その指導員として複数の日本人柔道家を招聘した。

当時の柔術の人気やイギリス社会への浸透を示す上で最も適切な例はコナン・ドイルの創作による名探偵シャーロック・ホームズが、『最後の事件（The Final Problem）』から生還が可能であった理由として「日本の格闘技バリツ（baritsu, or the Japanese system of wresting）」にホームズ自身が言及していることだろう（Bowen, 2004, p.456; 川成, 2004, p.84）。川成（2004, p.84）によると、この“baritsu”は「ジュウジュツ」「武道」「日本の格闘技であるバリツ」などと翻訳されているが、綴りの微妙な差異はあるもののバートン＝ライトの“Bartitsu”であるという見解が最も一般的である。つまり、岡田（2014, p.187）が指摘しているように、1903年のシリーズ再開第一作『空き家の冒険（The Adventure of the Empty House）』出版時には、小説のなかであれ日本の柔術はホームズが宿敵モリアーティとの対決を切り抜ける手段として当時の読者を納得させ得る説明であったといえるだろう。1892年には相撲と混同されていたことからは隔世の感がある。

このようにバートン＝ライトの新しい武術が瞬く間に人気となった背景には、前述した社会ダーウィニズムと優生学による身体への関心から生まれた労働者階級の成年男性における身体文化の流行があった。イギリスではプロシア生まれのユージン・サンドウ（Eugen Sandow）が最も影響のある身体文化の推進者であった。サンドウは1889年にロンドンのミュージック・ホール、ロイヤル・アクアリウムで連勝中の怪力男サムソンを負かし世界最強の男（World's Strongest Man）のタイトルを得て有名になったことを皮切りに、怪力ショーでイギリス各地を巡業、1894-96年にはアメリカでも興行を行った。その後、イギリスに戻ったサンドウは自らが体を鍛えるだけでなく身体の健康を保つための筋力トレーニングのシス

テムを考案し、『身体文化（Physical Culture）』を刊行して啓蒙活動を始める。やがてロンドンに開いた複数の直営教室や、各地の同好の士たちの集まりからすそ野が広まり、1901 年には世界初のボディビル大会を開くまでになる（Pottle, 2004）。

サンドウを典型的な例とするミュージック・ホールで観て楽しむ出し物としての人気から発展し、実際に個人が実施するものとなった身体文化のブームについては、個人が自らの肉体を鍛え上げ、それを視覚的に訴えるかたちで表現するという点で、学校教育での体育や中上流階級のスポーツ（前述の団体競技や比較的新しいテニスやサイクリングなどを指すと思われる）との違いが指摘されることもある（岡田, 2014, pp.192-193）。しかし、サンドウは学校への体育導入を支持し、本論文の研究対象である女性に向けてもエクササイズ法を考案している。また、サンドウ自身が「人種としての平均的基準の底上げをすることが私の目的だ」（Sandow, *Body-Building*, 8, cited in Pottle, 2004, *ODNB*［日本語訳は著者］）と述べているとおり、後年は国家のために新兵の訓練を自費で行うなど国家の力を増強することに力を尽くし、1911 年には国王ジョージ 5 世から勲章を受けた。その後、第一次世界大戦中には新兵訓練を行い何千人もの新兵を徴兵検査に合格させたとされている（Pottle, 2004）。岡田（2014, p.197）も指摘しているが、サンドウのアピールする身体文化に最も熱狂したのはミュージック・ホールの観客層である都市の労働者階級であることからも、大枠としては学校教育での体育や中上流階級のスポーツと同じく当時のイギリス社会で蔓延していた生物としての強さへの不安へ個人的な抵抗の表出として理解できる。

しかし、バーティツの人気は長くは続かなかった。ミュージック・ホールでは小さく体格も劣る日本人が自身よりもずっと体格の良いイギリスのボクサーやレスラーを投げ飛ばすのがショーの目玉であり、バートン＝ライトはそこから多くの収入を得ていた。そうした興行で見世物になることに反発を感じる日本人柔術家がいたことは想像に難くないだろう。収益の配分を巡ってもトラブルがあったと言われている。やがて、バートン＝ライトの学校は閉鎖され、日本人柔道家たちは自身の道を歩むことになる。そのなかでも最も本研究に大きなかかわりがあるのが、上西貞一と谷幸雄である。

上西はバートン＝ライトと袂を分かち、他の武術学校で短期間教えた後、1903 年にはロンドンのゴードン・スクエアに自身の道場を持った。そこに弟子入りしたのが後に武闘派女性参政権運動活動家の柔術指南として有名になるイーディスとその夫のウィリアムのガラッド夫妻である。また、上西はイギリス陸軍でもデモンストレーションや柔術指南を行い、士官の妻子に教えることもあった。ボーイスカウト創始者でありボーア戦争の英雄バーデン＝パウエルは上西のデモンストレーションを見る機会があり、大変感銘を受けたとも言われている（Brough, 2020, pp.67-68）。一方、谷幸雄は指導者としての活動も行ったが、ミュージック・ホールでの興行も続け、庶民の間で人気者となった。後には柔術を扱った映画にも出演している。彼の弟子には女優のマリー・スタッドホルム（Marie Studholme）がいる。上西は 1908 年にガラッド夫妻にゴードン・スクエア道場を譲り日本に帰国するが、谷は生涯イギリスに残りイギリス人女性と結婚、1918 年にロンドンに創設された武道会（The Budokai）で 1950 年に 69 歳で亡くなるまで指導を続けた（Bowen, 2004, pp.460-464）。

４．イギリスにおける女性と柔術

Figure 1

20 世紀初頭のイギリスでの女性の柔術実践については女性参政権運動を抜きにして語られることはまずない。戦闘的な手法での闘争も辞さなかったエメリン・パンクハースト（Emeline Pankhurst）率いる女性社会政治同盟（Women's Social and Political Union, WSPU）では、自身を含む組織の指導的立場にあった活動家を警官からの暴力や拘束から守るためにボディーガード（Bodyguard）と呼ばれるグループを作った。25 から 30 人ほどの女性が所属していたとされているが、警察に身元を特定されるのを避けるためにメンバーの名前は公にされていなかった。一方、そのメンバーのトレーニングをイーディス・ガラッドが行っていたことは当時からよく知られていた。これは 19 世紀末から基礎教育の浸透による識字率の上昇を受けて急速に発展しつつあった一般向け報道メディアにとっては格好の話題であり、Figure 1 のような女性柔術家の写真（*The Sketch*, July 6, 1910, p.425）やイラストなどを伴った記事が紙面をにぎわしていた。

しかし、柔術と女性参政権運動が直接的な関係があった時期は実はそれほど長くはない。ボディーガードが実際に活動していた期間は短く、ガラッドが女性自由連盟（Women's Freedom League, WFL）のアスリート支部長になった 1908 年（Godfrey, 2010, p.635; Kelly, 2019, p.12）から数えても、エメリン・パンクハーストが第一次世界大戦の戦争協力のため戦闘的運動の中止を発表する 1914 年夏までの 6 年ほどである。そしてなにより、WSPU はメディアに取り上げられることにより自らの主張に世間の注目を集めることへの成功体験があった（中村, 2017, pp.48-49）。WSPU の活動初期には上流婦人が投獄されるというような報道はショッキングであり、団体のイメージカラーを使った色鮮やかな服装やバナーでデモ行進やイベントを彩ることも戦略的に行われていた（佐藤, 2017, p.3）。そうしたなかで柔術に注目した理由は、その自衛術としての実用性のためだけではないだろう。

実際、女性参政権運動家たちが柔術を実践するようになる以前から、イギリスでは女性の間で柔術人気が広まっていた。例えば、著名な女性参政権運動活動家であり、作家・ジャーナリストでもあるエヴリン・シャープ（Evelyn Sharp）はジャーナリストとして活動を始めた 1903 年に軽妙な文体の柔術教室体験を「デイリー・ミラー（Daily Mirror）」に寄稿している。これは彼女が女性参政権運動に賛同し、WSPU に加入する以前のことである。ブラウスにスカート姿の女性が日本人と思われる男性と柔術の技を試す姿を描いた複数のイラストとともに掲載された半ページにわたる記事には、フーリガンから身を守るために柔術は最適で、特に力や体格が関係しないため女性向きであると説明されている（*Daily Mirror,* December 4, 1903, p.9）。また、

1910 年秋から 1912 年にかけて出版されたと思われる『すべての女性のための百科全書（Every Woman's Encyclopedia）』の「女性のレクリエーション」の項目では、スポーツ活動としてバドミントン、ゴルフ、テニス、フェンシング、水泳、ホッケー、ラクロスなどが、健康維持や自衛術として体操とならんで柔術（柔道）が挙げられている（滝内，2008, pp.155-157 & 180）。

こうした柔術の流行は、この時代に男性の場合と同様に女性の身体への関心が高まっていたことが背景にある。ヴィクトリア朝初期の上流階級では女性は「か弱き性」とみなされ、コルセットで体を不自然に締め付けた状態で、刺繍や読書など体を動かさない活動を推奨された生活の結果、やせすぎで青白く活力がない不健康な状態の女性たちが多くいた。この状態を改善するために 1830 年代から女性向けの室内でできる美容体操（calisthenics）が流行し、簡易なエクササイズを紹介した書籍も刊行された。美容体操とは腕と肩だけを動かし、胴体の動きはほとんどなく、筋力をつけることを目的とした男性と異なる内容の体操だった（グッドマン, 2017, 上 p.186）。その他の女性にふさわしいとみなされていた運動は、ウォーキング、アーチェリー、クロッケーなどで、時代ごとに流行り廃りはあるが、激しく体を動かすことがなく、「みっともない」服装も必要ないことが共通している（グッドマン, 2017, 下 p.108）。やがて、ローンテニスがもてはやされるようになり、自宅の庭につくられたコートで中上流階級の女性たちに興じられた（グッドマン，2017, 下 p.112）。その後、裕福な家庭の女性たちは女子パブリック・スクールでクリケットやホッケーなどの団体競技も行うようになり、その卒業生が進学した女子カレッジでもスポーツは奨励された。

一方、第二次ボーア戦争が国民の健康に社会全体の目を向けさせる契機となったのは前述の男性の場合と同じである。しかし、女性は男性と異なる期待を向けられ、異なる社会化の過程を経てきたことは疑いない。そもそも上流階級で女性が激しく体を動かすことを制限されたのも、その制限の結果である女性の不健康な状態を改善する必要が論じられたのも、子どもを産み育てるという女性の役割を損なうことを恐れてのことであった。男性たちは「か弱い性」である女性たちと家庭を守る役割を負うのに対し、女性たちは自己主張せず父親や夫に尽くし、慈愛をもって子どもを育てる「家庭の天使」であることが期待されていた。それが、20 世紀初頭には自分の家族のためだけでなく、国家の必要を満たすことも求められるようになったのである。

労働者階級の少女たちの教育が論じられるときも同様に、丈夫で健康な身体を作り、勤勉な労働者として働き、そして母親となって次世代の健康な労働者となる子どもを産み育てることが期待されていた（グッドマン，2017，上 pp.188-189）。そして 20 世紀初頭には社会ダーウィニズムの影響により母体としての女性の健康状態は個人的問題から国家的な問題となり、その風潮は広く社会に女性がスポーツを楽しむことのできる状況をつくりだしたということもできるだろう。しかし、楽しむためのスポーツは用具や服装、場所の確保にお金がかかる。経済的余裕も余暇もない労働者階級には、男子に公教育の場で軍事教練や器械体操が実施されたのに対し、女子には健康の保持と増進を目的としたスウェーデン式体操が導入された。また、しばしば男子の科学（science）の女性向け科目とされた家政学（home economics）で公衆衛生や栄養学の知識が教えられていく。こうした状況を池田（2015,

pp.63-64）は美容体操・スウェーデン体操・リズム体操をイギリス女性スポーツ史におけるジェンダー空間のカテゴリーの１つとして分析し、帝国意識と中流階級的な健康と医学のイデオロギーの影響を強く受けた、校庭で集団の健康管理を行う国家的ジェンダー戦略の現れであったと述べている。

義務教育の導入、特に女子体育への要求は、教員として女性が職を得る機会の増加という視点から本研究の対象である柔術を実践した女性たちの人生を考える上で重要である。世紀転換期になると女性の社会進出は進み、そのほとんどが結婚すれば家庭に入るにしても、学校を出た女性はいったん就労するようになっていた（滝内，2008, p.128）。労働者階級の優秀な女性にとって基礎学校教員となることは単純労働から抜け出す道筋が開かれることを意味している。同様に、「女性にふさわしい職場」として中流階級の女性も教職をめざした（滝内，2008, p.131）。ヴィクトリア朝の中流階級では、女性は家庭で守られているべき存在であり、家庭の外で給金をもらって働くことははしたないと考えられていたが、イギリス帝国の版図が広がり男性の海外移住が進むなかで結婚できない女性が増えた。そうした女性たちが就くことができるほぼ唯一の職業がガヴァネスであった。ガヴァネスは個人の家庭内に住み込み、もっぱら子どもたちの教育に従事する女性家庭教師のことであり、乳幼児の養育に携わる乳母やナニーとは区別された。しかし、家族でもなく、自身が雇用者と同じ中流階級の出身であることから一般的な使用人ともみなされない中途半端な立場と、子どもが成長すると職を失う不安定な雇用条件から、もともと裕福でない家庭出身の女性の場合は困窮する者も多く、19 世紀半ばには社会問題となっていた。いわゆる「余った女性」問題である。基礎教育法（1870）から始まり、やがて義務化（1880）を経て拡充されていく公立学校の教職がこうした女性たちの受け皿のひとつとなったのである。一方、女子中等学校から女子カレッジへ進学し、高等教育を受け、専門職につき、結婚せずに自立した生活をおくるなど、「新しい女性」として活動範囲を家庭の外へ広げていた女性たちもいた。そうした女性たちにとっても教員は女性の社会進出を支える職であり続けた。

しかし、その教員としての職も性差に連動した需要の差が存在していた。例えば、滝内（2008, p.139）は特に幼児教育、体育、家政科に女性教員が多かったことを指摘している。幼児教育や家政科とならんで、体育にも女性特有の目的があり、その達成には女性体育教師がふさわしいと考えられていたことがうかがわれる。このことは、女性体育教師養成に特化した学校の存在がこの時代に特徴的を端的に示しているといえるだろう。その隆盛のきっかけとなったのは 1881 年にロンドン教育委員会（London School Board）の女子体育視学官（Lady Superintendent of Physical Exercises in Girls' and Infants' Schools）となったスウェーデン人のマルチナ・バーグマン＝オスターバーグ（Martina Bergman-Österberg）である。彼女は教員向け研修を実施し、多くの女子基礎学校にスウェーデン式体操を導入させるなど、精力的に活動した。1887 年に彼女が実演を行った際には王族や教育関係の著名人も参観した。さらには、在任中の 1885 年に自身の学校を設立し、他の教員養成カレッジにも自身の教育システムを紹介するなどスウェーデン式体操に尽力した。その後、1888 年にロンドン教育委員会の職を辞し、自身の学校を拡張に努め、1895 年にはより広い敷地に移転するほど人気を

集め、卒業生は多くの教員養成機関で教員として雇用された。このように彼女自身とその学校がイギリスの女子体育教育に大きな影響力を持つようになっていくにつれて、他の女子体育教員養成学校も多く現れた。

そうした学校の卒業生たちは学校だけでなく、地域のクラブや私的な教室、夜間の成人クラスなどで教え、個人レッスンを提供していたものもおり、滝内（2008, p.140）は「彼らは教育者というよりは、それぞれの分野の専門家としてのキャリア形成を望んでおり、その評価を期待することが多かった」と分析している。この時代の女性柔術家の大半はこのカテゴリーにはいると考えられる。ゴッドフリー（Godfrey, 2012, p.88）が指摘するように、男性には類似の専門教育機関が存在しないこと、そしてこれらが中流階級の子女のための教育機関であったことは、この時代はまだ女性がスポーツを楽しむことは特権であり、「レディらしさ」を逸脱しない範囲であることも求められていた（香川，2020, p.170）ことにも関係があるだろう。

以上のような女性をとりまく社会状況のなかで柔術が女性に、特に中上流の令嬢や婦人に人気があったことの考察として、ゴッドフリー（2012）は、実際の柔道家たちの活動を参照しながら、小説の登場人物である「新しい女性」の心情を分析し、柔術ならば、女性らしさを失わずに、スポーツとして楽しみ、健康を保ち、自分の身を守ることのできる強さを手に入れることができると考え、そして社会でもそれを容認する土壌があったと述べている。一方、ルーザー（Looser, 2010）は柔術のエンターテインメント性に注目し、柔術パフォーマンスを披露していた女性たちの活動活動による一般女性たちへのフェミニスト的世界観の教育効果、一般女性たちへのフェミニスト的世界観の教育効果を論じている。その柔術がその効果を持ちえたのは、柔術が当時西洋世界に好意的に見られていた日本の伝統的武道であるとともに、嘉納治五郎が欧米に宣伝し始めていた柔道の精神性がヴィクトリア時代の価値観を色濃く残す当時の女性観と一致していたため受け入れやすかった可能性を指摘している。さらには、ボクシングなどのイギリスにもともと存在したスポーツと比べて女性が実践することに抵抗が少なかったのは、イギリス人にとって新しくエキゾチックな柔術はイギリスの伝統、つまり男性社会を連想する価値観と結びついていなかったことも理由として考えられる。ゴッドフリーやルーザ―の研究は当時の社会や文化、そして教育効果を論じている点で本研究への示唆に富むものである。しかしながら、先行研究の検討で指摘したように、ゴッドフリーは小説登場人物が主な分析対象であり、ルーザーは米・英・ニュージーランドの女性柔術パフォーマーを取り上げているが、イギリスの分析対象はイーディス・ガラッドである。ガラッド以外の実在した女性柔術家たちについての研究はほぼ手付かずであるため、イギリス社会におけるこの事象の全体像はまだ見えてきていない。

5．今後の展望

最後に、今後の研究への展望をいくつか紹介する。1905 年の「スフェアー（The Sphere）」誌には社交の場で柔術を楽しむ女性たちの絵（Figure 2）が掲載されている（*The Sphere*, August 26, 1905, p.189）。そこでは、柔術を見て楽しむだけではなく、上流婦人たちがスカート

を着たままマットレスの上で柔術らしきものを実践しているも様子が描かれている。また、女優兼ダンサーのギャビー・デリス（Gaby Deslys）と日本人柔術家エイダ（S.K. Eida）により1906年から1907年にかけてロンドンで上演されたショー「柔術ワルツ（The Ju-jitsu Waltz）」の写真（*Penny Illustrated Paper,* April 6, 1907, p.219）には、日本的な小道具（傘）や背景（屏風や掛け軸）が使われて異国趣味を演出するとともに、女性が男性を抑え込んだり、投げ飛ばしたりしながらも、女性らしさもアピールしている様子がうかがわれる。そこには前述した当時のイギリスにおける2つの相反する日本イメージが関係しているとみることができる。小さくかわいらしい、美しいものを作り出す人々という日本人イメージと、急速に近代化を進め、ヨーロッパの強国と思われていたロシアを倒した強い日本である。日本の伝統的武術である柔術により、小さな日本人は強大なロシアに勝つ強さを得ることができ、なおかつイギリス人がイメージする日本人の美質を損なうことがないのであれば、イギリス人女性も柔術の実践により女性らしさを損なうことなく強さを得ることができる。こうした言説や表象を分析することにより、当時の女性により柔術受容の様相を描き出すことが可能であろう。

Figure 2

また、こうしたイメージで柔術がイギリス社会に受容されていた20世紀初頭に、もともとメディア利用にたけていた女性参政権運動活動家がわざわざ柔術を選んで利用したことには、それなりの意図があったことと解釈するのが合理的であるように、できるだけ多くの女性たちの発言から柔術実践の意図が何であったのかを探ることも意義がある。イーディス・ガラッド自身の意図も「熱心な女性参政権論者だった」という説明では終わらない可能もある。ゴッドフリー（Godfrey, 2012, p.102）はこの点について疑問を投げかけ、少なくともガラッドはWSPUの中心的メンバーではなかったこと、様々なメディアの要望に応えてインタビューを受けたり、デモンストレーションを実施したりするような自身の宣伝ともとれる活動に余念がなかったことを指摘している。しかし、このアプローチには、できるだけ多くの女性たちの発言を収拾するという史料調査の困難が存在している。実際、ケリーが言及しているように最も著名でよく研究されているガラッドですら彼女の意図を探る手掛かりとなる史料は十分ではなく（Kelly, 2019, pp.9 & 20）、現在までの調査でも、その他の女性たちについては数人の存在が確認されたにすぎない。

この困難を克服するためには、対象ごとの調査の順番が重要である。具体的には、①最も研究が進んでいるWSPU柔術指導者ガラッド、②既に確認されているガラッドと同時代の女性柔術家たち、およびスタッドホルムなどの女優やパフォーマーとして活躍しながら柔術を実践していた女性たち、③柔術教室の生徒および柔術を実施していたとされる女子中等学

校や女子カレッジ、および女性のトレーニングに柔術を取り入れていた警察などを調査し、柔術を実践した女性たちの育成環境、教育、柔術実践者としての活動と発言、以降のキャリアなどから教育史的分析を行う。

おわりに

本稿では第一に19世紀末から20世紀初頭にかけてイギリスの国内事情や日英両国を取り巻く国際情勢によって生み出された小さく無力な日本とロシアに勝った強い日本という相反する二つの日本観の存在を指摘し、次にそれらが結びついた小さくても強い日本のイメージを背景にイギリス社会で柔術が人気を得てゆく過程を概観した。その後、当時のイギリス女性が自身のおかれた困難な状況を打開する手段として身体的な強さを求める傾向が現れるなかで、当時まだ影響力のあったヴィクトリア朝の伝統的社会規範のなかでの女性のあるべき姿と折り合いをつける上で、小さくても強い日本イメージと結びついた柔術は女性が強さを求める手段として都合がよいものであったという解釈が可能であることを示した。この一連の検討過程からイギリスにおけるこの事象の研究はWSPUとガラッドに関するものにほぼ限定されており、断片的ではあるが教育を含む女性の活動の各所にその痕跡が散在するにもかかわらず、女性による柔術実践全体のイギリス社会における位置づけについてはほぼ手付かずであることが判明した。また、日本からイギリスへの文化受容の事例としての分析も十分とはいえない。その理由は先行研究の関心がスポーツ史や文学、文化研究であり、教育史を専門とする本稿著者とは異なるという理由も考えられるが、なにより史料となり得えるまとまった情報が存在しないことが原因であることも明らかになった。

なぜ日本の柔術が20世紀初頭のイギリス女性に世間に認知されるほど実践されたのか。柔術を実践することが当時の女性たちの人生において何を意味したのか。こうした文化史と教育史両方の側面をもつ問いに挑もうとする歴史研究は、特定の出来事や人物を対象とする研究と異なり、明示的な史料が存在せず、状況証拠を積み上げる形で時代意識を描き出す必要があり特有の困難が伴うことはあらかじめ認識されていた。しかしながら、今後の課題として検討したように、様々な方向からの調査で得られる質も性質も異なる断面的な史料を少しずつ積み上げることにより、問いの答えに近づくことができるのではないか。ガラッドのようにすでにある程度の情報がある対象から徐々に段階を踏み、現在はほとんど情報がない対象へ調査を進める研究計画により、可能な限り目標に到達できるように努力したい。

引用・参考文献

飯田香穂里（2011）.「第8章 欧米における優生学とその影響」平田光司編『【講義録】科学と社会2010』, 総合研究大学院大学, pp.477-498.

池田恵子（2015）.「英国女性スポーツ史研究にみるジェンダー空間の分析」『スポーツとジェンダー研究』, **14**, pp.58-69.

井野瀬久美惠（1990）.『大英帝国はミュージックホールから』朝日新聞社.

ウェルズ HG（1989［1909］）『アン・ヴェロニカの冒険』国書刊行会.
岡田桂（2013）.「女もすなる Jiu-jitsu：二十世紀初頭のイギリスにおける女性参政権運動と柔術」『スポーツ科学研究』, **10**, pp.183-197.
岡田桂（2014）.「世紀末イギリスの柔術ブーム：社会ダーウィニズム、身体文化メディアの隆盛と帝国的身体」上野和子・大東俊一・塚田英博・丹羽正子編『ヴィクトリア朝文化の諸相』, 彩流社.
小野勝敏（2002）.「19 世紀末のイギリスにおける邦人の柔術講演 -- 志立鉄次郎の柔術論」『岐阜経済大学論集』, **36**, pp.185-200.
香川せつ子（2020）.「ヴィクトリア時代のスポーツとジェンダー：周縁化された女性たちの戦略」『ヴィクトリア朝文化研究』, **18**, pp.161-181.
川成洋（2004）.「イギリス 19 世紀末におけるジャポニズムの一側面―シャーロック・ホームズ、柔術、漱石」『異文化研究 / 国際異文化学会 編』, pp. 83-94.
グッドマン ルース（2017）.『ヴィクトリア朝英国人の日常生活 貴族から労働者階級まで』上下巻, 原書房.
佐藤繭香（2017）.『イギリス女性参政権運動とプロパガンダ：エドワード朝の視覚的表象と女性像』彩流社.
多和田真太良（2017）.「19 世紀西洋演劇におけるジャポニズム：「日本」の表象の変遷」人文科学研究科身体表象文化学専攻, 博士論文：学習院大学.
滝内大三（2008）.『女性・仕事・教育：イギリス女性教育の近現代史』晃洋書房.
中村久司（2017）.『サフラジェット：英国女性参政権運動の肖像とシルビア・パンクハースト』大月書店.
橋本順光（2009）.「黄禍論とジェンダー：柔弱から柔術へ」加藤千香子・細谷実編『暴力と戦争』, 明石書店.
橋本順光（2013）.「日露戦争期の英国における武士道と柔術の流行」『阪大比較文学』, **7**, pp.178-198.
溝口紀子（2015）.「女子柔道の誕生：講道館神話の分析」総合文化研究科国際社会科学専攻, 博士論文：東京大学.
光平有希（c. 2021）.「舞台化される日本イメージ（2）」『日本関係欧文史料の世界』, https://kutsukake.nichibun.ac.jp/obunsiryo/essay/20211020/〈2022-10-23 閲覧〉.
*
――（1905）. The Latest Drawing-room Craze. Ladies Practising the Japanese Art of Ju-jitsu. *The Sphere*, August 26, p.189.
――（1907）. The Ju-jitsu Waltz: Mille. Gaby Deslys in the New Dance at the Gaiety. *The Penny Illustrated Paper*, April 6, p.219.
――（1910）. If You Want to Earn Some Time Throw a Policeman!, *The Sketch*, July 6, p.425.
――（1910）. Bushido: The Spirit of Japan I. *The Academy,* September 17, pp.272-273.
Bowen, R.（2004）. Pioneers in Bringing Jujutsu（Judo）to Britain: Edward William Barton Wright, Tani Yukio and Ernest John Harrison'. In H. Cortazzi (Ed.), *Britain and Japan : Biographical Portraits*（Vol.5, pp.455-468）.
Brough, D.（2020）. The Golden Square Dojo and its Place in British Jujutsu History. *Martial Arts Studies*（10）, pp.66-72.
Callan, M., Heffernan, C., & Spenn, A.（2018）. Women's Jūjutsu and Judo in the Early Twentieth-Century: The Cases of Phoebe Roberts, Edith Garrud, and Sarah Mayer. *The International Journal of the History*

of Sport, 35(6), pp.530-553.

Dresser, C. (1878). The Art Manufactures of Japan, from Personal Observation. *Journal of the Society of Arts*, **26**, p.p.169-177.

Godfrey, E. (2010). Jujutsusuffragettes. In T. A. Green (Ed.), *Martial Arts of the World: An Encyclopedia of History and Innovation* (Vol. 2, pp.632-633). Abc-Clio.

Godfrey, E. (2012). The Last Heroin Left? In *Femininity, Crime and Self-Defence in Victorian Literature and Society: From Dagger-Fans to Suffragettes* (pp.86-106). Springer.

Hiraoka, M. (2015). *A Modern Utopia?: Images of the Japanese Education System in Britain c.1860-1914.* Thesis (PhD): UCL Institute of Education.

Kelly, S. (2019). Edith Garrud: The Jujutsuffragette. In R. McMurry and A. Pullen (Eds.), *Power, Politics and Exclusion in Organization and Management* (pp.8-23). Routledge.

Looser, D. (2010). Radical Bodies and Dangerous Ladies: Martial Arts and Women's Performance, 1900–1918. *Theatre Research International,* **36**(1), pp.3-19.

Pottle, M. (2004). Sandow, Eugen (1867–1925), Strongman and Physical Culturist. *ODNB*, https://doi.org/10.1093/ref:odnb/76284 <accessed: 2022-10-23>.

Rotunno, L. (2016). Trained Bodies from Gymnastics to "Jujutsu Suffragettes". *Victorian Review*, **42** (1), pp.37-43.

Rouse, W. L. (2017). *Her Own Hero*. New York University Press.

Sharp, E. (1903). Self-Defence Made Easy. How to meet a Hooligan's Attack and Utterly Defeat Him. *The Daily Mirror*, December 4, p.9.

Simpson, L. M. (1979). *Education, Imperialism, and National Efficiency in England, 1895-1905.* Thesis (PhD): University of Glasgow.

Wilde, O. (1907 [1891]). The Decay of Lying. In *The Writings of Oscar Wilde: Intentions* (Uniform ed., Vol. 10). A. R. Keller & Co., pp. 7-63.

Wolf, T. (2010). Bartitsu. In T. A. Green (Ed.), *Martial Arts of the World: An Encyclopedia of History and Innovation* (Vol.2, pp.451-455). Abc-Clio.

［付記］本研究は、JSPS 科学研究費 22K13629 の助成を受けたものです。